

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 遠藤 健太

論 文 題 目

アルゼンチンのナショナリズムとフォークロアの思想史
—イスマノアメリカ知識人による人種・民族的自画像の系譜—

(Argentine Nationalism and an Intellectual History of Folklore:
Aspects of Ethnoracial Self-images in a Hispanic American Country)

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	准教授	西村秀人
委員	名古屋大学	教授	櫻井龍彦
委員	名古屋大学	教授	内田綾子

論文審査の結果の要旨

1, 本論文の構成と概要

アメリカ大陸南米南部に位置するアルゼンチンは1516年からおよそ300年にわたるスペインの植民地時代を経て、1810年に独立を果たした比較的新しい国家である。植民地時代に先住民の数が激減し、またカリブ海地域のようにアフリカ系の黒人奴隷を導入して行うプランテーションなどがなかったアルゼンチンでは、独立以後の住民の多くはヨーロッパからの移民、特にスペイン系とイタリア系が多くを占めていた。そのような状況下で独立後、アルゼンチンでは国民文化像をめぐる知識人たちの議論が長くたたかわされてきた。本論文は19世紀後半から20世紀前半のアルゼンチンにおいて、知識人たちが言論活動を通じて描き出してきた国民文化像を考察する思想史研究である。その中でも20世紀前半に国民文化像をめぐる議論に参画してきた民俗学者に焦点をあて、土着主義的意図と実証主義的意図が必ずしも相容れない形でだけ展開されてきたわけではなく、その共存を図ろうともしていた点に着目し、これまでの国民文化像の議論の解釈に新たな観点を加えようとするものである。

本論文は序論・結論を含め全体で6章から構成されている。全体を2部に分け、第I部を「思想的背景」、第II部を「民俗学に描かれた「アルゼンチン文化」の肖像」としている。各部は2章ずつで構成されている。

序章では、この論文の研究背景・目的・意義などが述べられている。

第1章はマヌエル・ガルベス、リカルド・ロハスに代表される「百周年世代」と呼ばれる知識人の中で展開されたナショナリズム思想の特質を考察している。ナショナリズム思想の基底に物質主義批判とコスモポリタニズム批判という一般的傾向をもったうえで、スペイン性を称揚する「イスマニスモ」言説と、同時にインディオ性の存在も尊重しようとする「メスティシスモ」言説が併存し、「国民性の復権」と「外的要素の包摂」を両立させようとした現実主義的な折衷主義であったことを指摘している。

第2章では「国語論争」の経緯をたどりながら、そこにある欧化主義（＝反スペイン派）と土着主義（＝親スペイン派）の対立関係を描きつつ、親スペイン派が権威主義思想（民衆の間で育まれる文化の蔑視）を持っていたことを指摘し、第1章で取りあげたリカルド・ロハスが民衆主義（＝反権威主義）思想に根差したものであることを指摘している。

第3章ではそのロハスと、フアン・アルフォンソ・カリーソという2人の民俗学者に焦点を絞り、彼らのフォークロア（口承詩）研究の背後にある思想を分析し、「親スペイン」と「親インディオ」の間に横たわる両義性を指摘している。

第4章では20世紀中葉に音楽・舞踊研究で大きな業績を残したカルロス・ベガに焦点を当て、そこに描き出された国民文化像を分析している。それによってベガの研究が理論・方法上の制約によって研究対象の選別を行っており、それが国民文化の表象としようとする意図がなかったことを指摘し、またその国民文化像の欠如が欧化論やナショナリズムと枠組みを超え、欧州性と土着性、近代性と伝統性を同時に包含するようなアルゼンチン文化像を作り上げたことを指摘している。

結論では、他のラテンアメリカ諸国と異なり、先住民文化もアフロ系文化の要素も少なかったアルゼンチンにおいて、スペイン性が土着主義に特別な重要性を持ってきたこと、そして土着主義（ナショナリズム）と実証主義の相克という現象自体が両義性を有していたこと、を結論としてまとめている。

論文審査の結果の要旨

2, 本論文の評価および問題点

本論文の独創性は、一般にラテンアメリカの中で例外的な白人国家と考えられてきたアルゼンチンにおいて、これまでの研究蓄積が少なかった土着主義の思想に深く切り込み、分析を行い、親スペイン思想という形で土着主義の思想が存在してきたことを明らかにした点、また 20 世紀前半のアルゼンチン民俗学が、土着主義（ナショナリズム）と科学的客観性を尊重する実証主義のはざまにあって、矛盾を抱えながらもこの 2 つを共存させてきたことによって大きな成果を残すことが出来たことを指摘している点である。これらの指摘は従来のアルゼンチン本国における思想研究・民俗学研究の定説に修正をせまるものであり、第三者（アルゼンチンから見た外国人）の研究者ならではの視点に基づいた成果であると評価できる。

一方、議論が十分に展開されなかった側面もある。本論文の中心部分を成す第 3 章と第 4 章において、それぞれの民俗学者の国民文化像がどのような時代的・社会的背景のもとに論じられていたのかがさほど明らかでない。つまり、1920・30 年代のリカルド・ロハスとフアン・アルフォンソ・カリーソの思想、および 1940 年代・第二次世界大戦後のカルロス・ベガの思想が当時のアルゼンチン社会といかなる連関を持っていたのかがあまり分析されていない。また、これらの知識人の国民文化像が各時期の文化政策や先住民政策にもたらした影響についても論じられるべきであった。しかしながらこうした課題は次の研究段階で考察するテーマでもあり、それによって本論文の価値や独創性をそこねるものでは決してない。

3, 評価結果の判定

上記 3 名の委員からなる審査委員会は、平成 29 年 3 月 15 日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。